

『リオリエント』が提起するもの

【訳者からのコメント】

山下範久

早いもので、刊行直後の『リオリエント』を、私はじめて手に取ったときから、まる三年が過ぎた。幸いにして訳者である私の貧しい想像を超える範囲の読者を獲得し、訳書刊行後一年半足らずの今日現在ですでに三刷を重ねている。各方面からたくさんの書評も寄せられ、その反響の大きさに、いまさらながら原著の持つ魅力を再認識させられている。

しかし、あとで述べるように『リオリエント』を翻訳しようとおもいたったのは、ごく個人的な研究上の

関心に突き動かされたことであって、それがどのよう
に日本語の読者に受け入れられるかといったような
ことは、反省してみる余裕もなかったというのが正直
なところであった。まして訳者というものは、翻訳の
作業を終えてからも、紹介者としての一定の責任を果
たしつづけなければならないということなど、三年前
はおろか、訳本の刊行にいたっても、未熟な私には思
いもよらなかつたことで、訳書の刊行から今日にいた
る一年半ほどの時間は、その責任に追いかけれなが

ら、あつと言つ間にすぎってしまったというのが、実感である。

しかしながら他方で、ひとりの研究者でもある私は、自分の訳業について、多くの部数が出たから、あるいは好意的な書評が出たから、と一喜一憂に終始していられるほど脳天気ではいらなかった。実際、『リオリエント』刊行後、訳者としての役割を果たしていくなかで、私は、『リオリエント』を訳そうと考えた動機と訳書『リオリエント』の受容のされ方との間に、必ずしもしっくりこないものを感じるようになってきた。ここでは、シンポジウムを機会として、その違和感の所在を確認するために、あらためて、私が考える『リオリエント』が提起する問題を総論的に提示しておきたいと思う。

思うに問題は、大雑把に二つ挙げることができよう。そのひとつは、アジアをめぐる問題である。

『リオリエント』の副題は、「アジア時代のグローバル・エコノミー」である。十九世紀以前の世界における経済の重心はアジアにあり、グローバルに見た経済

循環のシステムの構造自体は、その構造を前提とした上での相対的な重心の一時的なシフトは別として、その後も基本的にかわっていないというのが、同書の主張である。

このようにミニマムに要約すると、同書の基本的な問題意識自体は、少なくとも日本におけるアジア経済史の水準から見た場合、必ずしも新奇なものではない。さらにいえば、グローバル・エコノミーの個々の地域についての叙述に関しては、近年の研究の蓄積によって、むしろ「常識」に属するようになったものが大半と言っても良い。

いつまでもなく、それらが日本の研究者にとつて「常識」となった背景には、先駆者の莫大な努力があった。本書のもとになったシンポジウムの三人のパネリストである杉原薫、浜下武志、川勝平太の各先生、さらに遡つて、西欧中心主義的な世界経済史観が全盛であったころから『リオリエント』に通ずる発想を展開してこられた角山榮先生といった方々が切り開いてこられた地の平が、われわれをして、「やっと英語の文献の水準も、ここまで来たか」という、いわば余裕のある

『リオリエント』受容に導いているといつてよかろうと思われる。

したがって、『リオリエント』の翻訳は、明治以来連綿と続く輸入学問の延長で、欧米の先進的な知見を導入する作業ではなく、すでに「リオリエント」された水準から、さらにその先を目指すための再導入の契機を提供する意図で行われたものである。

そして、その『リオリエント』によって再導入されるべき問題意識は、「アジア」という概念、そしてそのコロラリーとして提起されている諸概念の内実について、総論的な合意をいったん解体して論争に開くというところにある。「アジア」概念の内実を問わない『リオリエント』礼賛は、『リオリエント』以前から積み上げられてきた脱西欧中心史観の努力によって切り開かれてきた問題場を逆に閉じてしまうものではない。

繰り返しになるが、『リオリエント』の主張のひとつの眼目は、西欧中心主義史観に対する批判にある。それは、近代の世界史を、西欧起源の世界システムがその外部の諸地域を包摂していく過程として捉える

あるいは逆に、その過程を近代と呼ぶことにしている

という見たほうが良いかもしれないが、発想に対する批判であり、フランクが、マルクスやウエーバーから、ポランニー、ブローデル、そしてウオーラーsteinまでを、一刀両断に批判する際の根拠もそこにある。

このような意味での西欧中心主義批判は、これまで研究者の視界の後景にしりぞけられていた二つの空間的要素を前景に引きずり出す効果を持っている。ひとつは、ヨーロッパ/その他 といつかたちでは分節化されていないような具体的な空間的ひろがりであり、もうひとつは国民国家および(国民国家体系として存在する)世界システムという単位以外の空間的概念である。

この文脈において理解するならば、「アジア」という概念の(再)提起は、ヨーロッパ「世界」と非ヨーロッパ「世界」とを分割する思考と、世界システムと国民国家以外の空間的単位から視野を閉ざす思考の双方に対する抵抗のスローガンをなしていることとみることができる。具体的には、日本の学界では、社会経済史学会で提起された「アジア交易圏」という言葉が、このスローガンの役割を先導的に果たしてきたといえよう。

概念的抵抗の二つ戦線を示唆するこの表現は、より踏み込んだ正確な言葉遣いであると思う。

さて問題は、この「アジア」ないしは「アジア交易圏」というスローガンから、ヨーロッパ/非ヨーロッパの空間分割、世界システム/国民国家による空間分節の双方に規定された、われわれの歴史「空間認識」に対して、どのようなオルタナティヴが提起できるか、ということである。この点について、本書に収められた諸論考の著者の方々をはじめ、さまざまな論者が多岐にわたる着眼を示している。もとより本稿で全てを尽せるわけではないが、ここでの文脈にしたがってごく簡単に整理しておく。

最初に挙げるべきは「地域」(region)という考え方であろう。西欧中心主義的な世界史観への批判から、なんらかのオルタナティヴを提起へ向かう際の新しい空間的枠組の基本には、なんらかの意味で、この概念の媒介が必要であるといっても過言ではない。この概念は、形式的には世界システムの内部にありながら、国民国家体系によるその内部の分節とは異なる次元での空間の分節を前景化し、したがって国民国家体系に

よって規定されるような近代世界システムとは異なる世界システムのダイナミズムを、ひるがえって前景化する契機をはらんでいるからである。

もっとも第一次的には、地域という概念は、世界史のパススケブティヴにおける既存の空間的単位の規模の変更を意味しているに過ぎない。対象を同定する際に、スケールの変更がそれ自体として意味を持つケースはあり、ここでもそれは妥当しないわけではないが、「地域」の概念の理論的含意は、単にスケールの問題ではなく、それが既存の空間的想像力に引かれているさまざまな境界線 最も強力には国民国家の間の国境線を、いったん括弧にいれ、それらを横断するような単位を提起するところにある。さらにいえば、空間のスケールをどのように測るのか 物理的な距離なのか、モノやヒトが移動するのにかかる時間なのか、情報の流通や情報へのアクセス権の配分のかたちによるのか という問題にまで展開して考えれば、「地域」という概念自体が、ひとつの理論的契機として自己遂行的に解体し、歴史における空間という問題についての根本的な再考へ至る道の入り口にまで導かれる

ことになる。

しかしそこに至る以前の問題として、「地域」概念の理論的射程の範囲内において、「地域」概念の外延を具体化する試みは多様である。既存の歴史学が、西欧中心主義的であると同時に、土地にしばりつけられた民からの徴税、および徴税可能な土地の拡大に立脚する國家の視点^(ないしは、そのような國家が残した史料や「正史」)に立脚するものであったことを相対化するために、陸地から海洋へと視座の転換を図る試みも、そのなかに入れてよいであろう。本書のなかでいえば、川勝氏の「海洋史観」、浜下氏の「海域」概念は、そのような試みをリードするものである。

また、統治の論理や抽象的な経済的合理性の論理による現実の還元が、国民国家ノ世界システムを特権化する空間分節と認識論的に呼応することを意識して、それらの抽象的・形式的な論理^{フォーマル}による結合ではなく、もつと社会的な次元での具体的な人間および／あるいは人間集団間の結合のあり方に注目する考え方も急速に関心を広げている。いわゆる「ネットワーク」論である。これも浜下氏をはじめ、本書の寄稿者の何人か

の方々が強調しておられる視角であるが、ネットワークを支える「制度」を、どのように捉えるかという点については、論者によって多様な見解が錯綜している。特に大きな論点として、「取引費用」^{トランザクションコスト}概念を軸にできるだけ形式化したかたちで「制度」を捉える傾向と、むしろ形式化にまじまないような次元の実体として「制度」を捉える傾向とは、たがいに重なり合いを持ちながらも、かならずしも収斂しない問題場をなしている。

さらに、「地域」の問題は、決して静態的な空間の同定の問題ではない。「地域」とは、ある固有の属性にしたがって本質主義的に同定されるものではなく、むしろ交通の場として定義されるものである。そのような「地域」観は、移動という要素を前景化する。もとをたどれば、「アジア交易圏」概念も、従来のな生産中心主義的な発想に対して、流通の観点を強調する議論であったが、移動や交通の流れのうちにあるのは、モノやカネだけではない。本書の寄稿者のなかでも杉原薫氏が近年とみに強調しておられるように、人間の移動、つまりさまざまな形態の「移民」もまた、「地域」概念の重要な主題である。

ひるがえって、「地域」について、「本質主義」的な発想を拒否することは、単に動的な交通への関心の移動をもたらずだけではない。これまで本質主義的に捉えられてきた、諸々の空間的概念を、その本質主義から切り離して再解釈し、その史的妥当性を再検討することを含むものである。たとえば、「帝国」や「文明」、「都市」や「港市」といった範疇もそのような再検討の対象に入るかもしれない。たとえば、本書寄稿者のおひとりである籠谷氏は、明治における「開港」が、欧米に対して開かれた港だけではなく、アジアに対しても開かれた港であったという着眼から、前者の代表たる横浜に、後者の代表たる神戸を対置するかたちで、従来の「開港」の概念を見事に脱構築された。

このほか、アジア／アジア交易圏をめぐって、「地域」概念をめぐっては、本書の寄稿者の方々の発言と論考のひとつひとつが、さまざま可能性と方向性を示しておられる。ここでは、これ以上の議論は、さらに譲ることとしたい。

『リオリエント』をめぐる問題の第二は、同書に實際

に描かれた近世のグローバル・エコノミーの背後にある人類史観、ないしは人類史の時空分節のあり方についてである。

すでに述べたとおり、批判としての『リオリエント』は西欧中心主義に向けられたものであった。それは、ある意味では今日のヒストリオグラフィにおける「常識」であり、率直に言えば、私が『リオリエント』の訳出を思い立ったのも、その点とは関係がない。

では単なる批判をこえて、フランクは、どのような世界史観を提起しているのか。彼が「理論的に」主張しているのは以下のような人類史観である。

ウォーラーSTEINがいうような資本主義世界「経済やその他の世界」帝国などを含めて、さまざまな「史的システム」として考えられてきたものは、いずれも実際には自律的な実体などではない。それらは、その空間的・時間的な外部との交通・継承によって連続しており、ひとつのシステムとしての自律性は、せいぜい相対的なものでしかない。人類史上に存在したあらゆる社会は、少なくとも間接的に、人類史の総体をひとつの単位とするグローバルなシステムに文脈づけら

れたサブシステムでしかなく、少なくとも時間的に五〇〇〇年、空間的にアフロ・ユーラシア大陸の全体をひとつの単位とするような世界システムこそが、真に妥当な史的社会科学の対象である。

これがかんりの極論であることは認めざるをえない。実際のところ、私自身もこの「理論的」主張をそのまま受け取ることには、大きな留保がある。しかしながら、本書に再録される拙論『リオリエント』論争をもとめて「においてすでに強調したことだが、『リオリエント』自体が実際に論証しているのは、人類史の全体を単位とする世界システムそのものではなく、むしろ一四〇〇～一八〇〇年という限定された期間において、「基軸通貨」としての銀の流通によって定義されたひとつのグローバル・エコノミーの存在以上でも以下でもないということである。

むしろ、フランク自身の構想としては、それは書かれるべき全体の一部であって、『リオリエント』が、時代的に近世のみを扱っているのは、紙幅と彼の実際的能力の制約によるものではないということになろう。しかし私自身の見解としては、フランク本人の意図や

「理論的」主張よりも、『リオリエント』というテクストの方に忠実であるほうが生産的であると考えるのである。

その議論の詳細は、本書に再録された拙稿『リオリエント』論争をもとめて「を」覧いただくこととして、ここでは簡単にその展望だけを示しておこう。

一四〇〇～一八〇〇年におけるアフロ・ユーラシア規模のグローバル・エコノミーの存在の立証を是とし、そのグローバル・エコノミーの重心がアジアにあった（ヨーロッパは近世のグローバル・エコノミーにおいて周縁的な存在にすぎなかった）とする評価も、さらには是としたとして、その前後の時代との連続と断絶はどのように考えられるのか。また、グローバル・エコノミー内部の空間的な接合関係はどのようなものであったのか。この問いに向き合うことは、『リオリエント』に対するウォーラー・ステインからの、次のような批判が厳しいだけに、避けては通れないものである。

すなわち、一八〇〇年までの世界においてアジア（特に中国）がグローバル・エコノミーの重心であったというのなら、十九世紀以降の欧米列強による世界支配へ

の転換は、きわめて突然の出来事ということになり、またその転換がなぜ起こったのかもまったく謎になってしまう。つまり「フランクは、『ヨーロッパの奇跡』がいかに奇跡的であるかということを証明した[★]」のだというのである。

たしかにフランクも、一九七〇年代以降における東アジアNIEsの勃興を類比として持ち出して、グローバル・エコノミーにおける重心のシフトについて一定の説明を試みようとはしているが、決して満足のいくものではない。結局のところ、グローバル・エコノミーの存在を認めただでも、その内部の空間分節がどうなっているのかという点をリンケージや連続性一色で塗りつぶして、ブラックボックス化してしまうわけにはいかないのである。

実際、「基軸通貨」としての銀の流通はグローバルであったとしても、近世の世界は、理念としての単一の帝国秩序を分有する王朝間関係の枠組みをそなえた、いくつかの地域的なシステムの並立状況であった。近世のグローバリティの特徴は、それら地域システム間に交通があるにもかかわらず、そのような交通を、地

域システム内では、その理念的な単一世界としての空間認識¹ 帝国秩序に抵触しないようなかたちで管理する制度が機能していたことである。

一八〇〇年に起こったことは、近世的な地域システム間の交通 それはヨーロッパの資本主義世界経済vs外部世界という構図ではなく、ヨーロッパの地域システムを含む複数の地域システム間の対角線的な交通である の質と量の変化であり、それに伴う近世的な空間認識制度の機能不全である。その機能不全がもたらした制度の真空を埋めるかたちでグローバリゼーションの過程が始動した。

すなわち、『リオリエント』が提示したのは、近世のグローバリティ以上でも以下でもなく、むしろその近世的な空間分節の解体と変容の帰結として、グローバリゼーションの史的過程が展開したと考えるパースペクティヴが提起できるのである。これは、フランク自身の「理論的」主張を裏切るものであるが、同時にウオーラスティンによる批判にも一定の視角の修正を迫るものであり、あえていえば、『リオリエント』というテキストの精神には、より忠実な敷衍であると私

は考えている。

実際には、私自身が展開している右のような解釈も、フランクの人類史構想の全体に対して代案を提起する水準にあるわけではなく、たかだか、「一八〇〇年の屈折」の解釈をめぐって、相対的に分析的なモデルを構築する試みを行っているにすぎない。しかしながら、『リオリエント』のあとに、グローバルな人類史ないし生態史の構想に取り組むならば、空間分節の様式としてのグローバリテイの通時的な構造変化について、明示的な理論的主張が伴わなければ、それはフランクの貢献を無視するものであるといわなければならない。

シンボジウムを振り返って、『リオリエント』の拙い訳者として述べられることは、以上で尽きているが、最後に一点だけ補足しておく。

この文章では最初に、『リオリエント』が、日本の経済史学の水準から見れば、すでに「常識」に属することとがらをまとめたものでしかないといわれる側面があるということを指摘した。しかし、『リオリエント』の著者であるアンドレ・グンダー・フランクが、ドイツ

生まれアメリカ育ちの西洋人であり、アジア滞在経験もなければ、日本語も中国語も解さないような発話の位置から同書をものした、あるいはものしえたということ、そして同書が広い読者を獲得している、「WHA（世界史学会）一九九九年ブック・プライズ」および「アメリカ社会学会PEWS（世界システムの政治経済学）二〇〇〇年ブック・アワード」を獲得し、中・日・韓の各語に翻訳された、ということについては、それ自体として評価する必要がある。

いうまでもないが、それは「立場上困難な仕事をよくやりました」というような評価のことではない。むしろ『リオリエント』を一読、こんなものは日本では「常識」だと一蹴するような発話の位置自体についての反省の機会として、『リオリエント』を捉えようということである。「アジア」的な文脈におかれた「日本」の歴史は、それ自体が、西欧中心主義的な歴史記述がよそおっている普遍性のほころびを露呈させる一種の「特異点」をなしているといえる。そこでは西欧「近代」の等置の図式は端的に妥当しない。しかし、西欧中心主義的なヒストリオグラフィに対する批判は、その内容

と同時に形式面でも検討される必要がある。近代世界システムをヨーロッパ的社会システムの単なる延長として捉えるような単線的な歴史観を拒否するためには、単に歴史の多系性を指摘するだけでは不十分であり、そのような歴史の多系性の条件／制約となっている史

的システムの概念化にまで踏み込む必要がある。西欧中心主義批判を行う際の発話の位置に対する反省は、そのような概念化の努力の前提として要請される作業であり、同時に、その意味で『リオリエント』自体が読者に要求していることでもあるのである。

注

★1 杉原薫氏の証言では、この意味での「アジア交易圏」(ないしは「アジア貿易圏」という表現は、一九八四年の社会経済史学会のシンポジウムが初出である。その後も同学会では、アジア交易圏をテーマとするパネルは断続的に開催されており、特に一九八九年の記録は『アジア交易圏と日本工業化 一五〇〇—一九〇〇』としてまとめられた。刊行当初、また学部学生であった私が、のちに『リオリエント』に関心を持つようになる素地は、この書との出会いがきっかけであったといつてよいと思う。なお、同書はながらく入手ができなくなっていたが、二〇〇一年九月に藤原書店より新版として再刊された。

★2 ウォーラステインによる『リオリエント』批判は、Review 22:3 (1999) に収められた論文“Frank Proves the European Miracle”を参照。

